

動く世界人口と日本の使命

西^{にし}野^の入^{いり} 徳^{いさよ}

一、国家生命に対する人口の重要性

二、人間の歩み

三、白色人種と有色人種の動き

四、日本の使命

一、国家生命に対する人口の重要性

日本は現在四つの小島から成る僅か三七万^{km²}内外の頗る狭隘な一小地域に踞する一億程の少人口国に過ぎない。しかし、五億一千余万^{km²}に及ぶ地球表面の約30%に及ぶ一億三千五百八十万^{km²}を占める五大州には三三億以上の人口が種々様々の人種と国家とに分かれて団結居住し、それぞれ特色ある方面に亘って盛んに活躍している。ある国、ある民族は非常に高度の文化に進んだ強国であるに對し、ある者は殆んど原始未開其儘の弱小国に留まり、甚だしきは国家の体型をさえ具備せぬ放浪状態にあるものすら見られる。同じ人間でありながら、どうしても大差を持つもの

であろうか、ある人類学者は「それは人種により其祖先を全然異にするためである」と説くに対し、他の人類学者は「否、総ての人間は只一組の夫婦を祖先とし、それから漸次分かれて異った人種民族となったものである」と主張する。しかし現在多数の学徒が採る説は、後者すなわち人類一元説である。然らば久遠の大昔に於て、同一の祖先から生れ出た、この人間というきわめて神秘不可思議な被造物が、時代の経過と共に漸次多種多様に変化して、現在われわれの目に映ずるような相異った諸人種諸国家となるに至ったのは、全体何が原因となったのであろうか、開闢以来繰返される国家の興亡、民族の盛衰は、そもそも如何なる要因によって左右されるのであろうか。それは決して単一ではなく相当複雑であるが、それを大別して、自然的要因と人間的要因との二種類とすることが出来る。そして、その自然的要因中には、国土の地理的位置、山河の形態、海洋との関係および、地質、地味、氣候等、天然自然に備わる人間以外の外的諸条件のすべてを包含する。また人間的要因中には、国民の先天的に備えた生物学的基礎を形成する人種の差異および後天的に獲得する人口の量的ならびに質的実態、およびその産み出す政治、社会組織、宗教、道德、哲学、伝統等、その創り出すすべての文化をも包含する。また、この他に外国文化との接触関係は、これまた、一国の盛衰に対し、極めて重要な役割を演ずるが、これは国土の位置ともまた極めて密接な関係を有し、この点からすれば、自然的要因中に包含させることも決して不合理ではなからう。しかし、これはまた同時に外国人および外国文化に対する国民の態度如何によって、其反響に種々の差異を産み出すものであるが故に、この点からすれば、むしろ人間的要因に帰属するとも考え得る。故に外国文化との接触は結局天然적および人間的兩要因の合成と考えることが穩当であらう。

兎に角、人類は結局天然の児であるが故に、天然要因が極悪な処に於ては、極めて用意周到な文化設備を施さぬ限り、自然のままでは到底恒久的繁栄を所期し得ないことは明かである。たとえば、自然のままの北極または、熱帯一部瘴癘の地域等は其实例である。あるいはまた一時は天然に恵まれて大いに繁栄した民族が、何かの原因により、その恵まれた天然が著しく悪化し、そこに居住する民族が最早到底これに適応し得ない苦境に陥り、ついに衰滅の悲運に沈淪せざるを得ない場合もある。

われわれは地球の気候変化とそこに居住した原人の消長史に於て、最も明瞭にこれを窺い知ることができる。たとえば、今を距ること六十万年の大昔、地球第三紀最近上層構成時代の初期において、当時の気候其他の天然状態に最もよく適応した類人猿、直立猿人 (*Pithecanthropus Erectus*) が盛んに増加繁栄して、地球の主人公となったけれども、其後二十数万年を経過する中に、地球の温度が漸次変化し、同時にその他の天然諸状態もまた変化するに伴い、この直立猿人は、これらの諸変化に堪え得ず、ついに絶滅してしまい、これに代って、この新状態への適応力が最も強いハイデルベルグ原人 (*Heidelbergensis*) が紀元前三五万年頃、新たに出現して優勢となった。しかし、つぎの数年間の気候変化により、このハイデルベルグ人もまた瀕死の状態に陥り、これに代って登場したピルトダウン人 (*Eoanthropus*) および、それとはほぼ同時代に出現したネアンデルタル人 (*Nanderthalensis*) とが、地球の王座を占めるに至った。しかし、つぎの数万年間に起った気候変化に対しては、このピルトダウン人も、そしてネアンデルタル人も、その適応力がはなはだ薄弱であり、したがって、その人口が著しく減退するに至った。是に反し現代人に最も近い、いわゆる真人 (*Homo Sapiens*) は、この新気候に対する適応力が頗る強大であったために、ネアンデルタ

人に取って代って、新たに登場し、断然優位を占めるに至った。殊にアジア南部に出現したクロマニヨン (Cro-magnon) およびグリマルディ人 (Grimaldi) は、其適応力が殊の外旺盛であり、必然の結果として、其子孫は、ひとりアジアのみならず、遠く欧阿両大陸にまで進出して、ネアンデルタル人従来の優位を徹底的に奪い取るに至った。しかし、この新人の黄金時代も僅かに二、三万年に過ぎず、新石器時代に入って、氷河が急激に北退し、温度上昇して、以前の高原が湿潤の大森林地帯に化すると、にわかに疫病猖獗を極わめ、彼等の殆んど全部がその犠牲となり果てたのである。そして其後に続く新氣候とこれに伴う天然の新情勢に対する適応力の最も強い地中海人 (Mediterraneans または Iberians) その他の現代人の祖先が出現するに至った。以上は未だ国家を構成する段階に到達しない人間が、全く天然的要因のみに依って、其運命を左右された実例である。

しかし、第四期氷河時代の終了後、地球の天然状態には殆んど変化がなく、熱帯、温帯、寒帯の区別および四季循環は、年々恒常的であって、幾千年を経過しても、殆んど何等顯著な変化を示さなくなった。そして、現代人に対しては、其温帯が高い文化の建設に対して最も適当であり、およそ人間が真に堅実偉大な恒久的国家を構成するためには、結局其本拠を温帯に置くことが、最も望ましいということが、一般から認められるに至った。したがって、有史以後の世界に於ては、天文学的な大変化によって、国家の興亡、民族の盛衰を左右する程の大変動が、天然要因中に起らぬ限り、天然要因が、現代国家民族の運命に影響する程度は、単に其占有する国家の位置、海洋関係、地勢、地味、氣候、鉱産物等が、内には国民の生活様式を定め、外には国際関係を規制し、以って其国家活動に対し、一定の先天的条件を付与するに過ぎないのである。しかし、人智が発達し、文化が複雑化するに伴い、従来天然に絶対服従

して来た人間は、反対に今度は天然を征服し、これを支配する程度をだんだん高め、その結果、従来文明人の活動範圍外と考えられて居た寒帯および熱帯にまで、盛んに其驥足を伸ばし、ただに天然を左右するだけに満足せず、更に人間自身の妊娠出産までも、意のままに統制しようと欲し、ある民族の如きは、現に極端にこれを実行し、恐るべき不幸な状態にまで陥っている。したがって、今や天恵薄き国家必ずしも興国絶望なりと悲觀する必要がないと同時に、理想に近い天然要因をすべて具備する国家民族といえども、人間要因の変動如何によつては、必ずしも永遠の繁栄を保証し得ない段階に到達している。

換言すれば、宇宙近代の現段階において、国家民族の運命に対し、天然要因の演ずる役割は、消極的固定的であるに反し、人間的要因のそれは、頗る積極的かつ變動적である。したがって国家の消長、民族の盛衰に対し、後者は前者よりも遙かに高度の重要性を持つことは極めて明瞭である。そして、将来文明が進めば進む程、これが一層顯著となるのである。そしてこの人間的要因には、質と量との両方面があり、どちらも負けず劣らず頗る重要である。結局良質の人口を多量に保持することが、国家興隆、民族繁栄上極めて肝要である。さてその質は遺伝による先天的本質と、教育による後天的習得質との二種類から構成される。これら先天、後天の両質が共に優秀な民族によつて組織される国家は、繁栄の潜在力に富み、反対にその両者あるいは一方が劣弱な民族によつて構成される国家は興隆の可能性が、それだけ乏しい。つぎにこの遺传的潜在能力は運命的であり、各人種に先天的に備わり、後天的教育を以つてこれを変更することは絶対に不可能であると主張する論者もあるけれども、無私公平な実験心理学が証明する処によると、必ずしもそうではない。各個人間には、その体力、脳力何れにも、もちろん差異がある。これは異人種間ばか

りでなく同一人種間に於ても同様である。しかし各人種多人数の平均値を算出すると、それは各人種を通じて、ほぼ同一である。では異人種間にあるいは異国間に見られる文化程度の顕著な差異は、そもそも何に基因するのであろうか。もちろん、それは出生後、後天的に与えられる教養訓陶の優劣如何に依存する部分が頗る大である。

それ故に、今かりに、アフリカの未開蛮地に出生した一卵生双生児A、Bの中、そのAだけは、出生の蛮地で野生のまま成長させ、Bは出生後間もなく東京に移し、教養の高い立派な家庭に於て、用意周到に養育し、大学卒業後は、上流社会に生活して貴顕な紳士淑女と常に交際させ、完全な日本一流の文化人に築き上げる。そして二五、六才頃彼Bをその出生した蛮地アフリカに連れ戻り、生れた時以来、ずっとその蛮地で蛮地風に生長したAと同居させて、其兩者を比較すれば、遺伝によるその肉体的骨格相貌は、A、B兩者は相い酷似しているにも関わらず、其性格、挙動、趣味、知力等は著しく相異なり、これが果して一卵生双生児かと驚かされることは明かである。これは人間の質の優劣は極端な場合を除き、一般の人々に於ては先天的遺伝素質よりも、むしろ後天的教養訓練による努力の方が遙かに大きいことを物語るのである。それ故に、一国人口の質を優秀ならしめるためには、遺伝的に良素質を有する人口が多産増加し、遺伝素質の劣悪人口は反対に少産により自然減少することが真に望ましい重要なことであることは論をまたぬ処であるけれども、しかし、それは配偶者の選択を初めとし家庭生活の内容に関する微妙な問題を含み、其実現には相当の困難を伴い長期に亘る教育と国民各自の自覚と努力とに俟たねばならない。しかし後天的教育訓練による質の改善進歩は、国と個人とが一致協力断行しさいすれば、其実現は遺伝による改善に比し比較的容易であり、かつまた其効果は頗る顕著である。たとえば日本が明治維新以来百年にして、曲りなりにもよく世界の一等国にまで漕ぎ

着けるに至ったのは、必ずしも日本人の遺伝的素質が隣邦諸国民よりも特に優秀であるためとは断言できない、むしろ心身両面に亘る国民教育に力を注ぎ、以って日本人の質を後天的に向上させたことが主因であると見るのが隠当であらう。

さて、教育により後天的に人口の実質を優良化するに当り、頗る肝要なことは、其教育が単なる知育に偏せず、同時に精神教育と身心の実践的鍛錬とが必ずこれと並行することである。さもないと、知識と富とが増加し物資文明が旺盛となるに連れ、物的生活程度だけが不釣合に高まり、肝腎な精神生活程度がこれに伴わずして文弱に流れ、質実剛健な素質を喪失し、文化は華かに栄えながら、これを生産した人間其者の実態は、反対に衰頹調落する危険が濃厚となることは、古今東西の事実がこれを雄弁に実証するが故に、この点を特に注意することが極めて肝要である。すなわち知育の他に特に精神教育を重視することを忘れてはならない。そしてこの目的達成のために採らるべき精神教育の方法は多種多様であり得ようけれども、最も賢明有効な道は、すべての人の心の奥底に内在する宗教心を正しく成長発露させること、これに立脚した純潔強固な信仰を確立させること、そして其信仰を実践に移し、日々の生活を通して心身の鍛錬を積むことの三法を一体化する最も優秀な宗教訓育を、子供時代から、各家庭と社会とが相提携して用意周到に実行することである。

つぎは量の問題である。ある論者は量よりも質と称して、質だけを過重視し、量を軽視する傾向がまま見られるけれども、それは再考を要する。人口余りに少量の国家は、たとえば、其国民中に個人としては、きわめて優秀な人物があらうとも、国家としての強大は、少くとも現時の国際状況下に於ては、これを実現することは頗る至難の業である。

たとえば、スイス、オランダ、ベルギー、スウィーデン等の国々が、何れも相当高度の文化水準に達し、世界的の学者、芸術家さへ輩出しているにも関わらず、国家としての實力は必ずしも強大ではなく、國際的には固より、国内的行動に際してすら、隣接大国から直接または間接に制肘を蒙る場合が決してなしとしないのは、主としてその人口不足と深い関係があることを見逃してはならない。これに反し、龐大な人口を保有する国家は、たとえば、其文化程度は余り高くはなくとも、民族としての強靱な生命力を保有し、世界が如何に圧迫し、搾取しようとも、到底これを亡ぼすことはできない。たとえば、中国はその過去に於いて、國家の大部分が、文化の恩恵薄くして、現代文明國の水準を距ること甚だ遠く、例のアヘン戦争以来、列強搾取の対象となること、実に年久しかったにも関わらず、五千年の長い歴史を持つ民族生命のその流れは依然として力強く、あのアジア大陸の最良部分を家となし、あらゆる苦難を見事に克服し、今やただにその本国に於て頗る強固な内在生命力を發揮して、一大革新を断行し、その内政を一新しつつあるばかりでなく、さらにアジア、アフリカ兩大陸の全土に其勢力を進展させ、やがて全世界をその支配下におこうとする一大計画を樹立して、世界の最強國と自負する米露を一大不安に迫り込みつつある。かつまた、他方ラオス、ベトナム、ビルマ、タイ、馬來等を始めとし更に遠くシアワ、スマトラ、その他の南洋諸國ならびに南北兩米大陸に至るまで、着々と平和の進出を実行しつつあるあの支那民族、いわゆる華僑の實数は、無慮一千数百万に達し、なお年と共に増加しつつある。そしてこれら多數の華僑はその進出先諸國の經濟界に牢乎として抜くことのできない強固な實力を扶植し、それらの華僑を無視しては、これらの國々の政治家は、その内政も外交も、これを円滑に運営することが不可能な状態にまで追い込まれている。中國人が従来稅政の下に苦しみ続けたにも関わらず、常に國の内外に亘り、

このように根強い力を保有し、かつ将来も其前途ますます有望である所以のものは、もちろん、漢民族の質的優秀性も、ある程度与つて力あるけれども、結局支那七億に余るあの大人口が持つ、その強い強い無言の圧力こそが、その主要因であることに思いを致すとき、人口の量が如何に民族の消長と密接な關係を持つかを痛感せずには居れないのである。また印度が其文化程度至つて低く、国家的に、はたまた、國際的に幾多の難問題を抱えているにも関わらず、年と共に漸次強くなり、独立後、日なお浅きにも関わらず世界をして、其前途を刮目させる所以のものは、ガンヂス、印度兩大河から、遠く南方印度半島にわたるあの広大無辺な地域に居住する五億に余る大人口の鬱然たる圧力が、そもそもその根底であることを見逃してはならない。

これに反し、現代文化の精華を誇るフランスが、普佛戦争以来国力漸次低下し、かつてルイ十四世時代には、全歐洲を制圧し、ナポレオン時代には列強をして、其前に戦慄させたあの世界最高の國際的地位から顛落して、今や二等國となり、第一次世界大戰に於ては、同盟國の余の力によつて、幸にドイツに勝つことができたけれども、其後国力はますます低下し第二次世界大戰に於ては、到底ドイツの敵ではなく、開戦後、間もなく、首府パリは無血開城降服の非運を見るに至つた。さらにまた海外に於ては、長年その支配下にあつたアルジェリアの要求に屈して、ついに、その独立を承認せねばならぬ処まで弱つて來た。フランスのかかる弱化的根本原因は、結局全人口の増加力衰え、その圧力が著しく低下したためである。それは飛ぶ鳥も落すばかり旺盛だったあのルイ十四世時代のフランス人口は、全歐洲總人口の約 $\frac{1}{3}$ を占めたに對し、十九世紀初頭には、約 $\frac{1}{6}$ に低下し、更に最近に於ては、僅かに $\frac{1}{12}$ に激減した事實に徴しても、頗る明瞭である。戦争科学の進歩、軍隊の組織訓練、並びに國民精神の実態等が、戦争の勝敗に密接

の關係を持つことは、固より言を俟たぬ処であるけれども、國家間に生ずる人口圧力の著しい差異は、直接第二線の戰士および銃後勞務者供給力に影響して、其戰闘力を左右することは、極めて明瞭なことである。のみならず、人口増加力旺盛な國民と然らざる國民とは、その士氣に於て、青年と老人との差があり、したがって科學の進歩、軍事教練、産業開發、等々國家活動の各分野に及ぼす其間接影響もまた頗る大きい。故に一國人口圧力の變化こそは、實に國力消長の根本的重要原因であることを銘記せねばならぬ。十六世紀フランスの政治哲學者 Jean Bodin が、*Il n'est richesse ni force que d'hommes*. (國家にとり一ばん大切なもの、それは富でもなければ、武力でもなく、實に人間其者である^(註1))と警告したのは、決して故なきことではない。

註1 *Histoire des doctrines de la population* 表紙記載、其中の“II”を「國家にとり一ばん大切なもの」と敷衍し意識した。

二、人間の歩み

さて、國家、民族の生命維持發展に對し、かくも重要な役割を演ずる人間は、そもそも何時何処に初めて其姿を現わし、如何なる過程を辿って今日に至ったのであろうか。現在の處、専門學者間に未だ完全な一致學說を見るに至っていない。ある學者は人類の發生は紀元前五十萬年乃至六十萬年であるとするに對しある學徒は、紀元前二千萬年以上であると主張する。たとえば、アメリカ、ワシントン、D.C.の、勞力、教育研究所顧問(Manpower, Education and Personnel Consultant) ウェルシーヤー氏(Fletcher Welleneyer)は前者に屬し、人祖の出現を、紀元前六〇

万年となし、それがつぎのように漸増したものと計算し、さらに紀元二千年までの増加を推計している。^(註2)

註2 Population Reference Bureau, VOL. XVIII, No. 1, Feb. 1962, P. 3-11

第1表 紀元前60万年を人間の起原とする世界人口の増加

年次	600,000 B C	6,000 B C	1. A D	1650	1850	1930	1960	1975	2000
人口	人祖出現	5,000,000	250,000,000	500,000,000	1,000,000,000	2,000,000,000	2,992,000,000	4,500,000,000	6,268,000,000

他方、アフリカ、ケニヤ、ナイロビーのコリンボン博物館々長の英国人類学者リーキー博士 (Dr. Louis Leakey, Director of Nairobi's Coryndon Museum, Kenya, Africa.) は後者に属し、一九六七年の始め、前記博物館に於ての記者会見に於て、つぎのように発表している。

「アフリカ、ビクトリア湖中のルシンガ島から発掘された人骨は、紀元前二千万年以上のものである。これに依つて、人間は紀元前三百万年乃至五百万年にヒビから分離進化したものであるという説は全然誤謬であることが立証される。この人骨は、アフリカで発掘されたから、この骨の所有者に Kenya-Pithecus Africanus (アフリカ、ケニヤ猿人) とい学名を付ける。」^(註3)

註3 Japan Times, Jan. 22, 1967.

リーキー博士のこの説によると、人類の始祖は、二千万年以上の昔熱帯のアフリカに出現したのである。そしてそ

の骨格相貌は酷熱なアフリカの氣候、風土に適應した黒色人種であつたらしい。この黒色人種は人口の増加に伴つて東漸し、アジアに定住したものは長期間にアジアの氣候風土に適應した黄色人種となり、更にアジアから現在のペーリング海峡がまだ陸地であつて、アジアとアメリカとを繋いでいた当時、そこを通過してアメリカ大陸に移住した者が銅褐色のアメリカ人種となつた。それから何万年も経過した後に、アジア人の一部が漸次北上して欧州に移住定着し、その氣候風土に適應してついに白色人種となるに至つた。白色人種は黒人を甚しく嫌い、アメリカでは現在厳しく差別待遇されて居るが、白も黒も其本元を質せば皆同一の人祖を親とする兄弟姉妹であることを忘れてはならない。かくして最初はアフリカに始めて出現した一夫婦、一人種の黒人であつた人間と称する生物は、何千万年何千万年という長年月間に、漸次増加しつつ、他の大陸に移住を継続し、その移住地の氣候、風土、衣食住の変化に伴い、これに適應しつつ、相異つた人種を形成して、現在に及んだのである。

さて二千万年以前アフリカに居住した、このケニヤ猿人の人口は、全体何程であつたろうか？ それは知る由もない。リーキー博士もこれについては何事も述べていない。しかし二千万年以前に生存した者の遺骨が、ケニヤに於て何個も発掘された以上、人祖の出現はそれ以前のことであつたと推定すべきであらう。かりにそれが百万年以前、すなわち、紀元前二千一百万年であつて、その時、一組の人間夫婦が始めてアフリカの何処かに出現したと推定しよう。そしてこの夫婦の子孫が年と共に増加し百万年後の紀元前二千万年に一人人に到達したと推定する。百万年間に僅か一万人の増加は、過少であるとも考えられるかも知れない。しかし、当時アフリカの自然環境は、熱帯原始そのままであつて、暑熱厳しく、疫病蔓延し、加うるに猛獣毒蛇による被害も、また決して少くはなく、必然の結果として、

たとえ、その出生率が如何に高くとも、死亡率また頗る高く、時として出生率を越すことすらあったであらう。従つてその自然増加率は極めて低く、百万年間に、一夫婦から一人に増加したとの推定は、決して過少とは考えられない。そして其後の増加は第一表に示す Welleneyer 氏の計算数を採用しこの両者を結合して、一覽表を作製すると次の第二表のようになる。

第2表 紀元前2100万年を人間の起原とする世界人口の増加

年 代	21,000,000 BC	20,000,000 BC	6,000 BC	A. D	1650	1850	1930	1960	1964	2000
人 口	2	10,000	5,000,000	250,000,000	500,000,000	1,000,000,000	2,000,000,000	2,992,000,000	3,220,000,000	6,268,000,000

すなわち、紀元前二千万年に出現した一夫婦二人の人間が、百万年の間に一人となり、以後千九百九十九万四千年間に五百万となり、引き続き六千年間に五倍となつて紀元元年には二億五千万に達した。其後紀元千六百五十年に倍加して五億となり、つぎは二百年間に倍加して、千八百五十年に十億を数え、それに続く八十年間に更に倍加し、千九百三十年には二十億となり、更に千九百六十年には約三十億に迫り、そのつぎは僅かに四年間に約二億三千万人増加して、千九百六十四年の世界総人口実に三十二億二千万に到達するに至つたのである。国連人口部の推計によると、紀元二千年にはこれが六十二億六千八百万に到達する事になっている。本表を通覧して明かなことは、人類出現以後有史前の長期間に於ける人口増加は、極めて遅々であり、時としてはむしろ減退の時期すらあったものと推定されるに對し近代に入ると、殊に十九世紀以後に於ては、頗る急速な増加を示すに至つたことである。

二、白色人種と有色人種の動き

以上は地球上に居住するあらゆる人種を一括した総数であつて、人類がこの地球面に増加して来た有様を総覧するには、頗る有益である。しかし、世界の動きは、必ずしも全人類に平等に起るものではない。人種、国家の異なるに従つて、世界の動行に及ぼすその影響力もまた異なるのである。殊に二十世紀の後半になると、白色人種の有色人種に対する不安感が強まり、欧米人の間から「有色人種の脅威」(Mencace of Colour)^(註4)「有色白色兩人種の衝突」(Crash of colons)^(註5)「窮地に立つ白色人種」(Whitemans Dilemma)^(註6)等の著書が次々と公刊されるに至つた。従来、白人至上主義(White Supremacy)に生き抜いて来た白色人が何故にこのような不安感を持つに至つたのであろうか、その依つて来る原因は複雑であらうけれども、白色人種と有色人種との人口増加力の変化が、これと如何なる關係を持つかを知るとは、為政者は固より、われわれ人口の研究者にとつても甚だ肝要なことである。そこで私は、世界の総人口を白色、有色の二人種に大別し、その各々の人口とその地球上の支配面積との変遷を、三期に亘り比較対照して見た。其第一期を白色人種がまだ欧州だけに立て籠つて居た時代、すなわちコロンプスがアメリカ新大陸を発見した時から約一世紀前の紀元一四〇〇年とし第二期を白色人種最盛期、すなわち第二次世界大戦の勃発した一九三九年とし、第三期をアジア、アフリカ兩大陸に有色人種の独立国家が第二次世界大戦後しきりに新生し兩大陸の独立国総数七十を数うるに至つた一九六四年とし、その各期に於ける兩人種の人口と面積との変化を示すと左記第三表の通りである。^(註7)

註4 Gregory. T. W. 著 Menace of Colour.

註5 Mathew. B. 著 Clash of Colours.

註6 Peffer. N. 著 White man's Dilemma.

其各期の變化を理解し易くするために掲げたものが第一図から第六図である。

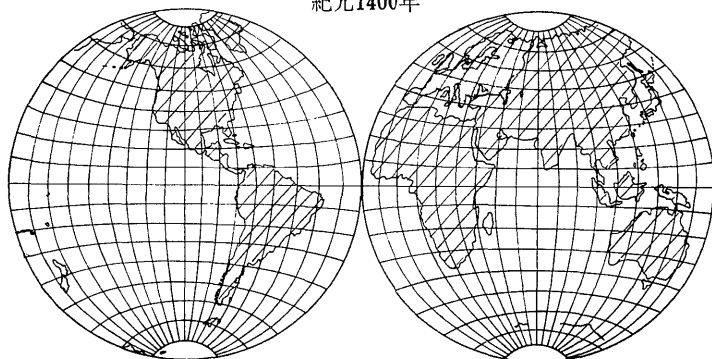
第3表 白色人種有色人種の人口と支配面積一覽表 (註7)

種 別	白 色 人				有 色 人				計			
	人 口	実 数	%	支配面積	人 口	実 数	%	支配面積	人 口	実 数	%	支配面積
年 次												
第一期	1400	5,400 万	14.5	1,050 万km ²	7.7	31,900 万	85.5	12,530 万km ²	92.3	37,300 万	100.0	13,580 万km ²
第二期	1939	85,000	40.0	11,810	87.0	130,000	60.0	1,770	13.0	215,000	100.0	13,580
第三期	1964	110,000	34.0	9,591	71.0	212,000	66.0	3,989	29.0	322,000	100.0	13,580

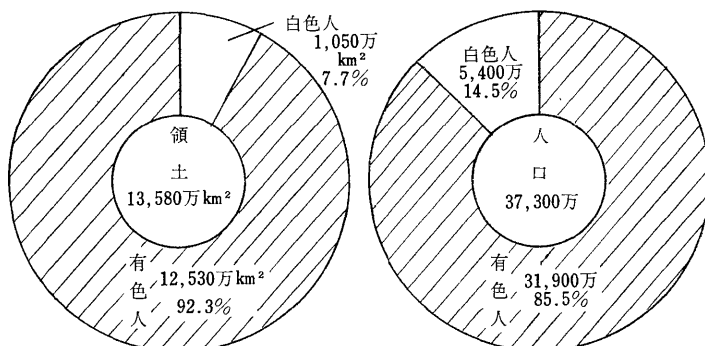
註7 Population Bulletin, Population Reference Bureau Vol. XVIII. No. 1. P. 10 及国勢社…日本国勢図会一九六七年版二九頁

第3表が示すように一九〇〇年の世界人口は三億七千三百万である。そして其中、白色人種は五千四百万であつて、総人口の一四・五%に当り、其支配面積はただ欧州だけの少面積、千〇五十万km²、内に局限され、地球陸地総面積一億三千五百八十万km²の僅かに七・七%に過ぎない。これに対し、有色人種は三億一千九百万人を数え、総人口の

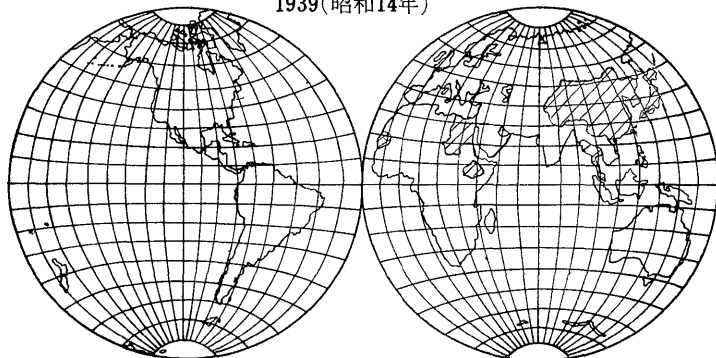
第一図 人種別世界の人口と面積(現地)
紀元1400年



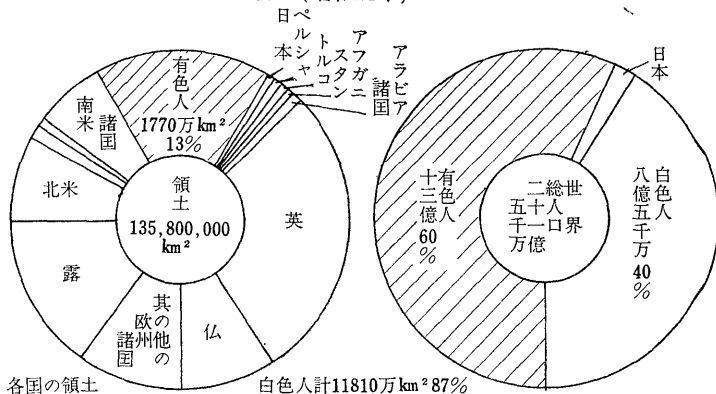
第二図 人種別世界の人口と面積(百分率)
1400年



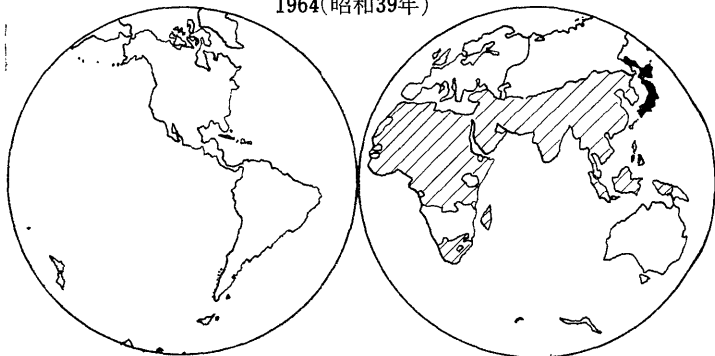
第三図 人種別世界の人口と面積(現地)
1939(昭和14年)



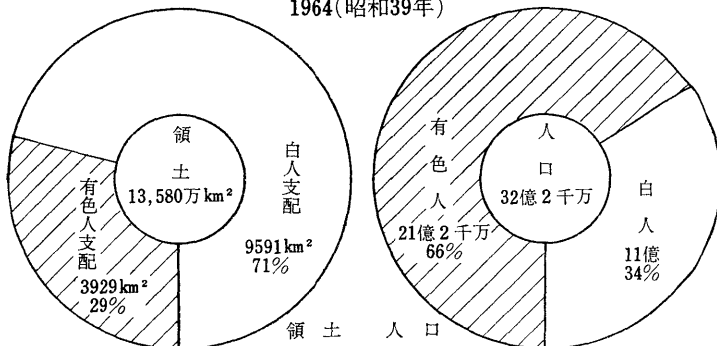
第四図 人種別世界の人口と面積(百分率)
1939(昭和14年)



第五図 人種別世界の人口と面積(現地)
1964(昭和39年)



第六図 人種別世界の人口と面積(百分率)
1964(昭和39年)



八五・五％を占め、その支配面積は、五大州の中から、小さな欧州だけを差引いた後の全部一億二千五百三十 km^2 、すなわち、世界陸地面積の九二・三％に達している。換言すれば、第十五世紀の初期に於て、有色人種は、白色人種に比し、人口に於て約六倍、支配面積に於て約十二倍を保有し、人口、支配面積どちらに於ても断然白色人種の遙か上方に優位を占めていたのである。それ故に第十五世紀は確かに有色人種至上時代であった。と云うても決して過言ではない。しかし、此時代に於ては、白色、有色兩人種何れもその人口密度は未だ余り高くはなく、従つて経済的理由によつて大規模の移動を敢行する必要には迫られておられなかった。かつまた交通機関も未だ原始の域を余り遠くは出て居らなかつたために、一部少数勇敢な貿易商人を除き、一般人は生れた小地域内に一生を過し従つて、白色、有色兩人種が相接触する機会は極めて稀であつて、敢て他の地域を犯す意志も必要もなかつたのである。

しかし、その後の五百年間に、兩人種の勢力関係に実に驚くべき一大変化を齎し、第二期すなわち、一九三九年、第二次世界大戦勃発當時には、第一期に於ては高く優位を保持していた有色人種は、其色褪せて後退し、反対に第一期には狭い欧州地内に立て籠つていた白色人種は、そこを抜け出して五大州の全域に其勢力を拡大し、今や世界は白色人種全盛の時代となるに至つたのである。先ず人口面を一瞥すると、白色人種は、一、四〇〇年の五千四百万から、その約十六倍に増加して八億五千万となり、世界総人口に対する比率は、第一期の一四・五％から、一躍四〇・〇％に上昇した。またその支配面積に於ては、第一期の千〇五十万 km^2 から、一億一千八百万 km^2 と、十一倍以上に増大し、世界総面積に対して占める率は、第一期の七・七％から八九・〇％とこれまた、十一倍以上に達した。これに対し、有色人種は、はるか後方に瞠若たるの観がある。すなわち、その人口は、第一期の三億一千九百万から、第二期の十

三億と、僅かに四倍程度の増加に過ぎず、従つて世界総人口に対して占めるその率は、第一期の八五・五％から第二期の六〇・〇％へと、白色人種の飛躍的上昇とは反対に、三〇・〇％も低下してしまつたのである。さらにその支配面積を見ると、これまた第一期の一億二千五百三十万^{km²}から、第二期の一千七百万^{km²}と約 $\frac{1}{7}$ に激減し、世界総面積に対する比率は、九二・三％から一三・〇％へと一大転落を演じてしまつた。

さて、白色人種が、第一期から第二期へのこの五世紀間に、かくも驚くべき一大発展を遂ぐるに至つたのは、そもそも如何なる原因によるのであろうか。それは、当時欧州に於ける彼等白色人種の人口増加力は非常に旺盛であつて、その物凄い過剰人口の強圧に彼等は骨の髄まで悩み苦んだ。しかし、その解決を、積極的な産児制限に便らず、積極的な国外への移住進出断行に求めたのである。すなわち、極めて強烈な過剰人口の圧力に悩み抜いたこと、そしてその悩みの積極的解決策として海外移住を断行したこと、この二つが彼等白色人種が五百年間にすばらしい発展を遂げた主要因である。第十五世初頭に白色人種が居住していた欧州は、独立した一大陸というよりは、寧ろアジアの北東から大西洋に突出した一つ半島と、その分岐地点の周囲から成る、アジア大陸の一小部分に過ぎない、しかも、其南方地中海に面した部分は暫らく別として、その中部北緯50度以北は、氣候寒冷、地味また全体として必ずしも豊沃ではない。従つて農耕科学未発達十五、六世紀に於ては、その食料生産額は決して豊富ではなかつた。しかし、そこに祖先以來定住し、比較的天恵薄い自然環境に鍛えられた当時の欧州白色人は、頗る敢為、勤勉、進取の氣象に富み、かつまた、頗る子煩悩でもあつた。加うるに、彼等が信奉するキリスト教が、墮胎、避妊を極悪の大罪として厳しく戒めたので、彼等は如何に貧乏であらうと、食料が不足しようと、子供の出生を故意に制限しようとは決して考えな

かった。勢い、強い強い人口圧力が韓々^{ヒシシ}と欧州の天地に迫って来たのは当然である。しかし、彼等は産児制限など絶対^{ヒシシ}に為さず、そしてその強い人口圧力の吐け口を国外の新天地に求めたのである。殊に有為の青壮年者の間には、海外移住殖民熱が鬱勃と燃え上り、抑えようとしても、これを抑え得なくなった。時恰も良し、コロンブスのアメリカ発見が報ぜられた。後年続いてまた濠州が発見された。時こそ到たれとばかり、西、葡、英、仏、伊、其他の欧州諸国民は、これらの新天地へ盛んに移住してこれを開発し、そこに新国家を建設した。そして各家庭には十人乃至二十人の子供の出産が、決して珍しくなかったのである。必然の結果として、白色人種の人口はそこに激増したのである。他方十六世紀から廿世紀にかけて、激増する彼等白色人種はその強い人口圧力に押された結果ただに新大陸への移住だけに満足せず、更にアジア、アフリカの旧大陸其他へ盛んに進出して、有色人種祖先伝来の土地を彼等の植民地となし、これらを彼等の支配下に置くに至ったのである。例えば、ロシアは、十六世紀に於て、早くも西比利亞に東漸を開始し、一六八九年には、ネルチンスク条約により、外興安嶺以北を、また一八五八年には愛琿条約によって黒竜江以北を、そして一八六〇年には北京条約によりウスリー江以東の地を獲得して浦塩斯德を建設した。更に一八七五年には、千島列島の宗主権を日本に認める代償として樺太を占有し、一八九八年には、旅順、大連を支那から租借するに至った。またフランスは、アフリカに進出し、一八三〇年にアルゼリア、一八八一年にチュニス、一九一一年にモロッコを獲得した。さらにアジアに於ては、一八六二年に、武力に訴えて安南から交趾支那を奪い、更に現在戦禍の巷となっているベトナム、当時の印度支那全部を仏領となし、一八九三年には、カンボヂアをも獲得した、そして十九世紀後半以降に於て、太平洋上の小島を領有し、一八九九年には広州灣を租借した。それから英国は、十七世紀

から、北米に植民を開始したけれども、一七七六年北米合衆国の独立によって、その最良部分を失い、ただ北方の寒冷地帯カナダだけを保持する悲運に陥つたので、その穴埋として、十八世紀後半、濠州への植民を開始し、そこにもアングロサクソンの新天地を開拓した。他方旧大陸への進出は、一六〇〇年東印度会社の設立を以って始まり、一八五八年には、印度のムガル帝国を亡ぼし、ビクトリア英国女王は、同時に印度女帝を兼ね、東西両洋に其勢威を輝すに至った。更に一八二四年にはシンガポールを、一八九六年には馬來半島を、一八四二年には阿片戦争によって香港を領有するに至った。他方アフリカに於ては一八一五年ウイン會議に於て、南阿、セイロン、マルタを英領となし、其北方にあるトランスバール、オラニエン等は南阿戦争後、どれもまた英領となるに至った。其他、オランダ、ベルギー、ドイツ等もまた前記諸国と相伍して、アジア、アフリカ等にそれぞれ植民地を建設し、その収益によって白色人種の人口支持力は、いよいよ、ますます増大し、それに伴つてますます増強される人口圧力をますます精明有効に運用することにより、白色人支配圈を更に拡大したのである。

かくして十五世紀の初めには、世界陸地総面積の僅かに七・七%以内の狭い欧州に閉ち籠りながら、極めて強烈な人口増加力を持続した白色人種は、その高圧人口力を積極的かつ精明に善用して、五世紀間に五大州の全域に進出して、その八七・〇%を支配するに至ったのであつて、これ実に白色人種の黄金時代であつたのである。これに反し、有色人種諸国は、日本は別として、其他は年と共に白色人種に蚕食されて、あるいはその領土となり、あるいはその植民地と化し、第三圖、四圖に見るように、有色人種の独立国は、アフリカに於ては、ただエジプトとリベリアの二国だけ、またアジアに於ては、日本、支那、タイ、イラン、ネパール、其他、二、三の小国に過ぎず、しかも、日本

以外は大部分、其文化著しく立ち遅れ、國際競争場裡に於て、到底白色人種の敵ではない。当時、白色人至上主義とか、白色人優越主義とかを唱導する者が少くなかったのも、決して故なきことではなかったのである。

しかし第二次世界大戦後、動く兩人種人口の立場から見た世界状況には、第二期とは全く異った一大変化が現われ、人口に於いても、支配面積に於ても、有色人種の方が、白色人種よりも高速の進歩を示すに至ったのである。この大戦に於て、有色人種の先駆者日本は、先進国英、米、露、仏、其他独伊を除く白色人種諸強国の殆んど全部を敵として戦う破目に陥り、当然の結果として、開闢以来未曾有の大敗を喫し、無条件降服を強いられ、国土の半分近くを奪われたばかりでなく、幾多の犠牲を余儀なくされ今なおその余波に苦しみつつあるのである。しかし、それにも関らず、この戦争は有色人種を覚醒奮起せしむる強い刺激となったのである。と云うのは、この世界大戦に於て、有色人種の一小国日本が、強大を誇る一流白色人諸国の多数を敵に廻して敢闘し、最後には衆寡敵せず、ついに兎を脱いだけれども、初期に於ては、連戦連勝によって其偉力をよく發揮し、以って白色人種の心胆を寒からしたのである。この日本軍の白人軍に対する勝利が、全世界の有色人種に、多大の刺激と自信と奮闘心とを喚起した。自分達を圧迫搾取する白色人種は頗る優秀強大な人種であつて、有色人種は到底其敵でないと、従来すっかり諦めきっていた彼等は、この赫々たる日本の武勲を目のあたりに見て、彼等が長期間持続して来た従来の白人優越観をここに打ち捨て、今や、「白人敢えて恐るゝに足らず、須く彼等の圧迫搾取を脱して、われわれの独立国家を創建しよう」との彼等の人種的あるいは国家的自覚とこれに基く新国家建設への熱望とは何物もこれを抑止することが不可能となつて来た。

其結果、白色人種の支配下に在った植民地は、年と共に続々独立し、今や有色人種の独立国家が、アジアに於ては

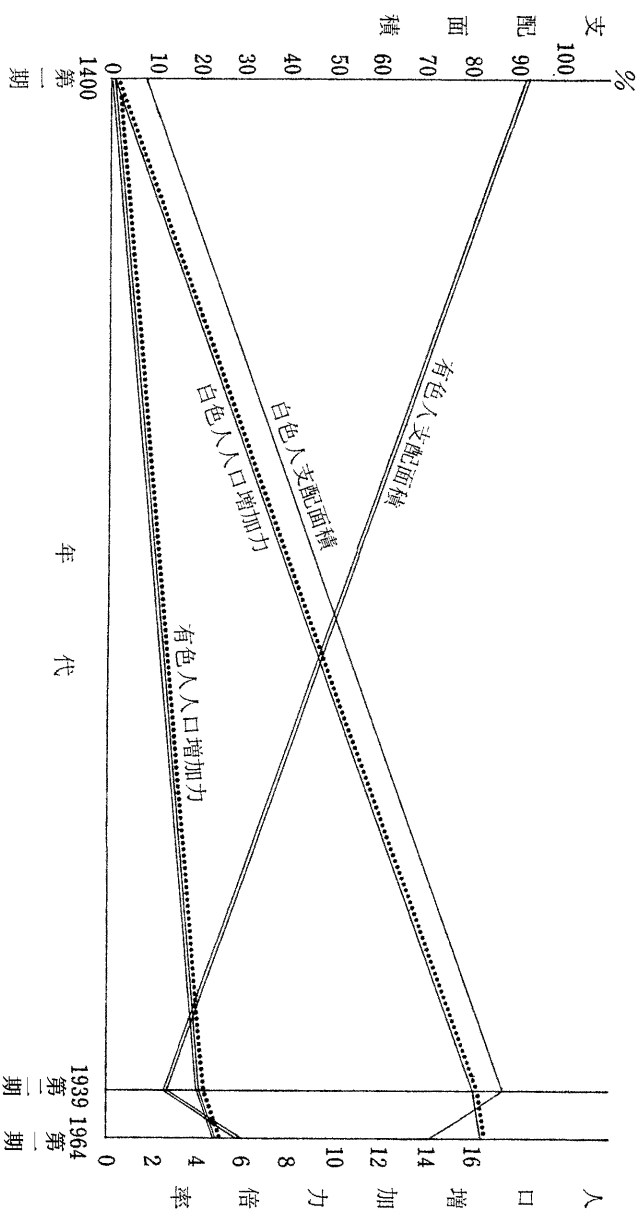
第二期の教ヶ国より三十一ヶ国にアフリカに於ては第二期の三ヶ国より三十九ヶ国にと増加するに至った。そしてこれらアジア、アフリカ両大陸の有色人種独立国家合計七十ヶ国は国際連合の加盟国総数百三十三ヶ国の半分以上を占め、その世界政治に持つ実勢力は、年と共にますます強大化しつつある。こうした有色人種の勢力伸展の根本原因は、もちろん、彼等の人口増加力が、白色人種に比し、遙かに優越して来たことである。今第3表を一瞥すると、第二期から第三期まで戦後二十五年間に、有色人種の人口は十三億から二十一億二千万に急増し、其後も年々二・五〇三・〇％、すなわち、五千二百万と六千三百万ずつ増加しつつある、この二十五年間の増加を百分率を以て表示すれば六三・〇％に登り、世界総人口三十二億二千万の六六・〇％を占めるに至った。また、有色人種の支配面積に於ては、更に高度の生長を遂げて、三千九百二十九万^{km²}に達し、第二期の一千七百七十万^{km²}の二倍以上となり、世界総面積に対する割合もまた、二十五年前の一三・〇％の二倍以上の二九・〇％に達するに至った。

これに反し、白色人種はその人口に於て、第二期の八億五千万から、第三期の十一億へと、僅かに二億五千万の増加に過ぎず、その増加率は、三〇・〇％に達せず、有色人種増加率の六六・〇％の半分以下である。従って、世界総人口に対して占めるその比率も、また三〇・〇％に減少し、前期の四〇・〇％に対し一〇・〇％も少なくなった。また、その支配面積は、九千五百九十一万^{km²}で、前期の一億一千七百五十万^{km²}よりも二千二百五十九万^{km²}、すなわち二〇・〇％程減少し、世界総面積に対する比率は七一・〇％となり前期の八七・〇％に比し、一六・〇％の減少を示すに至った。これを図示すれば、第七図の通りである。^(註8)

第二期の数ヶ国より三十一ヶ国にアフリカに於ては第二期の三ヶ国より三十九ヶ国にと増加するに至った。そしてこれらアジア、アフリカ兩大陸の有色人種独立国家合計七十ヶ国は国際連合の加盟国総数百三十三ヶ国の半分以上を占め、その世界政治に持つ実勢力は、年と共にますます強大化しつつある。こうした有色人種の勢力伸展の根本原因は、もちろん、彼等の人口増加力が、白色人種に比し、遙かに優越して来たことである。今第3表を一瞥すると、第二期から第三期まで戦後二十五年間に、有色人種の人口は十三億から二十一億二千万に急増し、其後も年々二・五〇三・〇％、すなわち、五千二百万と六千三百万ずつ増加しつつある、この二十五年間の増加を百分率を以て表示すれば六三・〇％に登り、世界総人口三十二億二千万の六六・〇％を占めるに至った。また、有色人種の支配面積に於ては、更に高度の生長を遂げて、三千九百二十九万^{km²}に達し、第二期の一千七百七十万^{km²}の二倍以上となり、世界総面積に対する割合もまた、二十五年前の一三・〇％の二倍以上の二九・〇％に達するに至った。

これに反し、白色人種はその人口に於て、第二期の八億五千万から、第三期の十一億へと、僅かに二億五千万の増加に過ぎず、その増加率は、三〇・〇％に達せず、有色人種増加率の六六・〇％の半分以下である。従つて、世界総人口に対して占めるその比率も、また三〇・〇％に減少し、前期の四〇・〇％に対し一〇・〇％も少なくなった。また、その支配面積は、九千五百九十一万^{km²}で、前期の一億一千七百五十万^{km²}よりも二千二百五十九万^{km²}、すなわち二〇・〇％程減少し、世界総面積に対する比率は七一・〇％となり前期の八七・〇％に比し、一六・〇％の減少を示すに至った。これを図示すれば、第七図の通りである。^(註8)

第七図 各期間人口増加率の変化と支配面積の移動



註　すなわち、第一期から第二期の間に白色人種は人口が十六倍に増加し其力により支配面積が十一倍に増加したに對し、有色人種は人口増加僅かに四倍に過ぎず白色人種の $\frac{1}{4}$ である、其結果支配面積が $\frac{1}{4}$ に大減少した。しかし、第二期から第三期の間には、白色人種の人口増加は僅かに三〇％に過ぎず、其結果支配面積は八一％に減少した。しかし、有色人種の人口増加は白色人種の二倍、六〇％に達し其結果支配面積は二二・五％に増加したのである。

略言すれど、現在世界の總人口は約三十三億を算する。そして其三分の一すなわち十一億は白色人種、三分の二すなわち二十二億は有色人種である。そして、その年次増加率は白色人種約〇・九％、実数約一千万人、有色人種は約二・六％、実数約五千七百万である。すなわち、有色人種は白色人種に比し、その年次増加率に於て、約三倍、増加実数に於て約六倍に近い速度を以て毎年累増しつつある。しかも、この兩者間の開きは、将来年と共にますます拡大する可能性が頗る強烈である。何故かと云えば、人口の増加率は文化の程度に應じて、大体つぎの三段階に別れる。

一、多産多死期　最低文化時代であつて、人口は余り増加しない。

二、多産少死期　文化生長時代であつて、産児制限を為さぬ限り人口は自然にかつ比較的迅速に増加する。

三、少産少死期　文化爛熟時代であつて、出産能力減少し、産児制限を為さずとも、人口は余り増加せず、むしろ減退することすらあり得る。

今、世界の現状を一瞥すると、白色人種は、すでに第三段階に入り、あるいは將に入ろうとしているが故に、その人口増加力は現在以上に上る可能性は余り多くないであらう。これに反し、有色人種は、アフリカ、アジア等の奥地に全くの原始第一段階に留る少数民族を除き、その大部分は、第二段階に属し、文化向上の途上はあり、其人口増加力は頗る旺盛であり、不自然なことをせぬ限り、この増加量はますます大となる。もちろん彼等はその人種、民族、

および生活する自然のおよび社会的環境の異なるに従つて、その文化程度を異にし、其巾が、頗る広い、従つてその人口増加力にも、また多くの差異があることは、もちろんである。しかし、總体的に云い得ることは、彼等は大体に於て、白色人種に比し、比較的低い簡易生活に満足しながらよく働らき、より早く結婚し、相当高い出生率を保持しながら、より高い文化へと漸次向上しつつある。殊に新興国の若者中、向上心特に強き者たちは、先進者たる白人に追いつき、更に白人を追い越そうとの、強い念願に燃えつつ、人口の自然増加を阻止するどころか、却つて其増加を喜び大いに奮闘努力している。彼等のこの向上への熱意と、その簡素質実剛健な生活と、そして不撓不屈の奮闘とは、漸次彼等の文化を高め、富を増加し、同時にその人口をますます増大させ、民族の実力を更に強大ならしめ、やがて一大新文明を建設するに至らせるであらう。このような有色人種の勃興は、ある一面から見れば、既に文化の爛熟期に入りつつある白色人種にとっては、一種の脅威と映ずるかも知れない、今や、有色人口爆発論が、欧米人によりまた、一部の有色人により、熾んに提唱され、其対策として避妊が、しきりに勧告奨励されつつあるが、苟くも、有色人種の否、全人類の健全なる進歩向上を念願するものは、この謬説に迷されることなく、自然法の指針に従ひ、よしその道は狭く峻しくとも健全なる文化繁栄に進む正道を堂々と邁進することが肝要である。今や白人至上主義は色褪せ、有色人種が天より賦与されている真価を研磨し、その本色を充分に發揮して、神と人類とに対する有色人種の責務を果さねばならぬ新時代となりつつある。かかる重かつ大なる使命達成に対し、最も肝要な第一条件は、有色人種の質と量とを強化することである。そして、その質の強化には、心身の教育錬磨にこれ努め、その量的強化には、人口の健全なる増加を助長することがきわめて肝要である。現在日本に流行しつつある墮胎と避妊とは他に悪影響を

及ぼさぬうち一日も早くこれを絶禁せねばならぬことであつて、全世界のすべての人口、殊にわれらの近親たる有色人種は、日本のこの大罪惡に決して感染されぬよう不斷の警戒を怠らぬことが最も肝要である。

四、日本の使命

第二次世界大戰を契機として、有色人種が全面的に世界の活舞台に進出したことは、前述の通りである。しかし、残念ながら、文化の点に於てまだまだ、白色人種に及ばぬこと、はなはだ遠いものがある。すでに述べたように、人口の量だけは彼等の二倍を有するけれども、その支配面積に至つては、前期に比すると相当に増加はしているけれども、総計僅かに三千九百二十九万^{km²}に過ぎず、白色人種の半分以上である。有色人種がその人口量に於て白色人種の二倍であるにも関わらず、その支配面積は反対に白色人種の半分以上である原因の最大なるものは、人口の質、すなわち、その文化、教育程度の著しい立ち遅れである。それ故に、有色人種がこの立ち遅れを是正し、更に其實力を發揮して、益々その世界的地位を高めるために此際は非実行せねばならぬことは、一方に於て、現在の高度人口増加率を保持するとともに、他方人口の質の改善、すなわち、心身の教育修練に最善の努力を傾注することである。

さて、二十二億の有色人種が、其開明度の高さも低きも、すべてが一致団結、歩調を揃えて、この文化修業、教育鍛鍊に邁進するために、先ず第一に必要なことは、其先頭に立つて采配を振る、きわめて優秀な指導中心国の選択、決定である。如何なる社会といえども、健全な進歩を遂げるには優秀な中心的指導者が絶対に必要である。この榮譽

ある、しかし、頗る重大な責任を担う地位は、何れの国民に委託さるべきか、白人国からも、もちろん、援助は仰がねばなるまいけれども、この偉業実行の中心的責任者たる総指揮者は、どこまでも有色人自身でなければならぬ。然らば、有色人独立国家七十ヶ国中、果してその何れが、此重任を満足に充たし得るであらうか、恐らく一国もないであらう。しかし、どうしても必要である。そこで不満足ながら有色人種中一ばん優秀有能な国民にこれを依頼せざるを得ないことになるであらう。其場合、無私公平に判断して、白羽の矢は好むと否とに関らず、日本の上に立つであらう。何故かと云えば、日本は数千年に亘る古い固有文化を有し、これに印度の仏教文化支那の儒教文化を取り入れて立派な東洋文化を建設したばかりでなく、明治維新以来、熱心に西洋文化を採り入れ、東西両文化の長所を巧みに結合して、ここに世界新文化を建設すべく今や努力中である、有色人種はこれを見て日本に憧憬れ、日本に信頼し、日本の指導を希望する会慮が一般に強烈である。正直に告白して、私は、日本が自力だけでこの重任を満足に果たし得るとは思わない。しかし世界の現状下に於て、有色人種全体からの囑望あるに於ては、日本国は不肖不束かを省みず、天佑を祈りつつ敢えてこの重責を引き受けねばならぬことになるであらう。

いよいよそうなった場合、この重責を満足に果たすため、日本は何をなすべきか、先ず第一ばんに、つぎの五目標を確立して有色同胞に明示し、一致協力以って其実現に努力せねばならぬ。

一、有色人種全部に初等教育を義務化すると同時に、其中から有能者を抜擢し、それぞれ手別けして近代諸科学、すなわち、自然科学、社会科学、および人文科学の各分理に亘り、理論と応用を専攻させ、専門の学者、技術者を養成する。

二、正義と愛とを本質とする有神哲学に立脚する崇高敬虔な世界觀を確立し、人類相愛情神に燃えしめる。

三、先ず有色人種支配地の中、その既耕農地を近代化すると共にその未開地を開拓利用して、増加途上にあるすべての人口に対し有り余る食料を豊富に供給し、更に進んで、漁業および商工業方面の開発に歩を進める。

四、人口の健全なる増加を恒久的に保持する途を講ずる。

五、以上を実行するに必要な巨大の資金は、其一部を有色人各国をして、其財政力範囲内に於て若干分担させ、其他は、日本国が中心となり、先進諸国の援助または融資に依つて支弁する。

前記五項目の実行を有色人否、全人類に向つて訴えるに際し、その指導中心の責任国として、日本国は先ず自らつぎの五つを実行して、範を示すことが必要である。

1、諸科学の学理研究と其応用とに大躍進を遂げ、單に米露の月探險程度に止らず金星、火星其他の諸方面に、一層広範高度の研究を進め、人間の居住に好適な新天地を発見し、そこに、日本民族を始めとし地球上の諸民族を盛んに移住させること。

2、「闇の夜に啼かね鳥の声聞けば、生れぬ先の父ぞ恋しき」と一休和尚が詠じたように人間には生れながらに、宗教的本性がある。われわれ日本人は、今から努力して、このわれわれに内在する宗教的本性を円滑に裁養育成し、家庭、学校、社会、すべての環境を通じ、正義と愛の神に立脚する敬虔なる人類相愛情神に徹底し、全人類の福祉増進を理想となし、この理想実現こそ、日本民族が天より稟けた一大使命であることを確乎不動の国民思想信念をなし、国民挙つて其實行に努力するよう、訓陶する。

3、後進国の農業開発指導に對し必要なる農業技術者を多數養成派遣すると共に、勤勉忠実な日本農民の一部を、後進各国に集団移住させ、原地民と相協力して、各国農業の改善開発に挺身させる。

4、年年繰返す二百五十万以上の墮落と全国的避妊を指導奨励する惡法、優生保護法を即時撤廢し、墮胎と避妊とを日本全国より徹底的に驅逐し、各家庭は平均五人程度の子供を産み、これらを質実剛健な人物に育成し、以つて日本民族の人口増加年率を二〇程度に保持する。そして必要に應じ兒童扶養手当を支給する。

5、前記後進国開発、文化進展に必要な諸経費支弁のため、日本国は毎年国民所得の一〇%を拠出する。

以上の如くにして、有色人同胞を指導啓発するこの偉業は、天の恩恵により、一足先きに文化の道を歩むに至つたわれら日本国民が、天より稟けた尊い使命であり、重い義務である。固より其実行は決して簡単なことではなく、幾多の困難を伴うことは明かである。しかし、断じて不可能ではない。精神一到、何事か成らざらんや。天は自ら助くる者を必ず助ける。使命に真に忠実なる者に対しては、天必ず力を与え、天これを完成さす。要は吾等が持つ使命感の堅固さと其実行意欲の熾烈さである。徒らに小成に安んじて、享樂、偷安の夢を貪り、醉生夢死、自滅の深淵に沈淪するよりは、断乎たる決意を以つて日本民族が天より稟けたこの大使命を篤と自覚し、如何なる苦難をも見事に克服しつつ、われらの兄弟姉妹である有色人種すべてを指導啓発して、その心身兩方面の幸福を保証し彼等が人生の眞価を充分に發揮できるよう、吾等の最善を尽し、以つてわれらの使命を完成することこそ全人類の福祉を増進すると共にまた日本民族自体の恒久的幸福と繁榮をも併せ保証する賢明な方途である。敬愛するわが同胞各位、希わくは一致団結この大使命達成に邁進せられんことを！